



report 01 15年目の多門川再生

これまでの堀割論議のなかで、時々、そして継続的に使用されてきた絵がある。また、この作者として、求めに応じて新聞や雑誌のインタビューに答えたり、この多門川の絵をのせて来た。この間、将来展望がなかなか開けないなーと感じながらも、今日に至っている。

新潟水辺の会が発足して間もない頃、そのオープニング記念セレモニーに見た映画「柳川堀割物語」に多いに刺激を受けた。私たちも新潟で何かしなければと考えていた。新潟大学の熊研究室の平成2年度の卒業研究論文「新潟堀割の歴史と再生に関する研究」中沢忍著（現新潟県職員）を拝見し、また現地調査等を繰返し、多門川再生が多くの堀割のなかでは一番可能性が高いということから、多門川再生に取り組む決意をした。ここで大熊先生のアドバイ스가あったことは言うまでもない。

多門川の延長1.4Kmは、街中を流れるコンクリート3面張りの川を再生し、見事にコンベンションシティとして蘇ったアメリカテキサス州のサンアントニオ市を意識し、一般市民にも理解しやすいように畳一枚程の大きさで全体鳥瞰図と断面パースを作成した。新潟水辺の会の新潟中央公民館5階ホールを会場とした発表会の一週間前から自宅に帰らず、事務所に泊り込み最後の作業の取りかかった。当日ぎりぎりに何とか完成し、眠い目をこすりながら発表した記憶が蘇ってくる。完成した時はもう2度とこのような作業はしたくな

いと思ったものであるが。

ここ数年の堀割再生市民会議の地道な活動によって、市民の間に堀割再生の機運が高まってきた。これまでの夢物語から実現に向けて少しずつ動き始めている。新潟水辺の会

では内閣府の自然共生型社会形成研究イニシアチブ助成研究事業として新潟市を中心に活動している、市民団体に広く呼びかけ「多門川再生研究会」を立ち上げた。

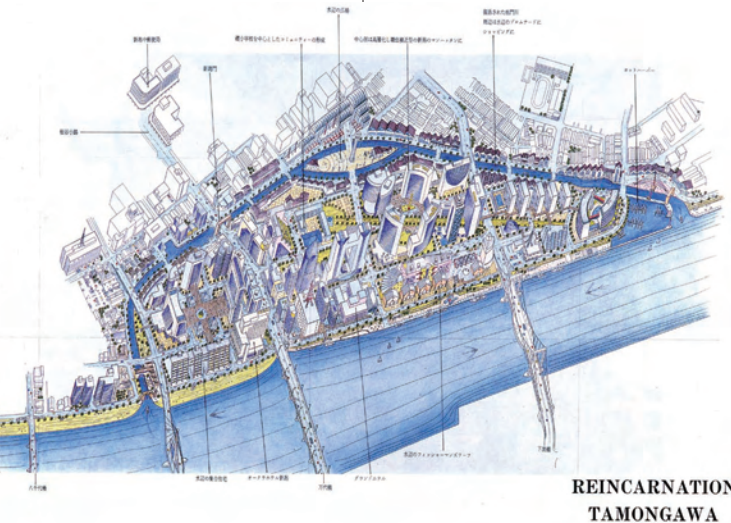
その第3回目の活動として9/17（土）に多門川周辺の木揚場教会を会場に「ソウル市の都市河川清溪川再

生に学ぶ」と題してシンポジウムを開催する。これはソウル市から関係者を招き、ソウル市の高速道路を撤去し、中心部を流れていた清溪川（チョングジョン）を再生した事業から学ぼうという取り組みである。当日どんな議論になるか楽しみである。

私たちの活動はこの日に止まらない。今後は継続的な堀割再生に向けた取り組みが求められている。この多門川再生をとおして新たなビジネスモデルの提案や、実施に向けて市民の合意形成と事業化への提案も重要となってくる。自分自身にとっても、15年前の水辺の会発足時の多門川再生鳥瞰図、断面図を超えたエネルギーを注ぎ込むことが求められているだろう。

上山 寛

（建築家：新潟水辺の会会員）



多門川再生計画鳥瞰図 1990年

report しなの考流会の思い出

今年のしなの考流会は、遅れてきた梅雨の影響も心配されましたが、7月2、3日の二日間の日程で、長野県明科町で行なわれました。雨にも降られず、無事に過ごす事ができ、内容の濃い研修会となりましたことを、お世話いただいた長野の皆様にご心より感謝申し上げます。

千曲川、信濃川の雄大な川の考流会にはとてもロマンを感じ、出来るだけ参加をと心がけています。

長野は湧水が豊富で、水産試験場では信州サーモンの誕生を知らされ、大切に育てられ、すべてメスだけということ、また繁殖能力を持たないため、卵によけいな栄養を取られないので、常においしいということなど大変興味を持ちました。

湧水といえば、わさび畑でとうとうと流れる水に手をひたしたらその冷たさに身がひきしまり、とても印象的でした。

その後の研修会で、綺麗な水に棲むと言われるイワナ・ヤマメ・アユにいたるまで魚に異常が生じて、純粋な魚が少なくなっているという長田さんの話にはびっくりいたしました。



長野県水産試験場（長野県東筑摩郡明科町）
を見学する参加者達

7月13日の朝日新聞に興味深い記事が載っていました。

上高地の水鳥が群れているのを不思議に思っ
て確かめたら、梓川のほとりでお弁当を広げ
ている人達がおかずをつまんで川に放っている姿
を目にし、失望したというお話です。

以前には見られなかったこういう風景から、いつの間にかこのような勝手な行動が生態系を大きく崩す原因を作っているということを私達はもっと自覚しなければいけないと思いました。



国営アルプスあづみの公園（長野県南安曇郡穂高町）
入口での参加者記念撮影

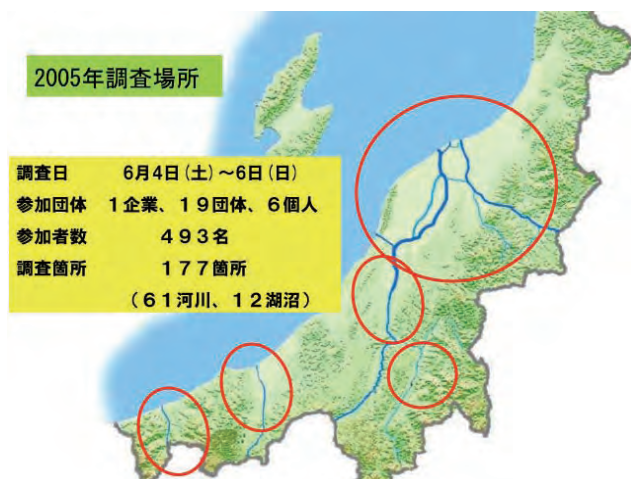
川で遊ぶ施設をいくつか見学させていただき、宿泊先の長峰荘では川端康成、井上靖、東山魁夷の三人と一緒に訪れた長峰山からの北アルプスと安曇野の風景を「残したい静けさ美しさ」と絶賛したというお話には大変感動いたしました。

長野はぐるりとアルプスの山々に囲まれ、自然豊かで美しく、今回は少し雲が多く、その雄姿を見ることは出来ませんでした。あづみの公園の雄大な風景と共に、わさび味のソフトクリームをいただいた時のほのかな香りが私を包み、忘れられない楽しい二日間でありました。

長谷川 恵美子
(新潟水辺の会会員)

report 2005年「身近な水環境の全国一斉水質調査」

今年も昨年に引き続き「身近な水環境の全国一斉調査」が、多くの参加団体や個人、学校、幼稚園など多くの方々の応援で、6月5日（日）を中心に行われました。



◎昨年に比べ、調査地点が2倍に増えました

■ 昨年は5団体40名の参加者で、下越の信濃川、阿賀野川を中心とした17河川と湖沼合わせて85ヶ所の調査でしたが、今年は1企業、19団体と6個人、計493名で、一級河川の47河川と、二級河川15河川、その他湖沼の計177ヶ所の調査が行われました。(全国では約5000ヶ所)

■ 昨年と比較してCOD値が全体に低い傾向でした。又、三回計った内0が二つ以上の地点が5ヶ所あり、思っていた以上に良い河川も見つかりました。しかし、中越地方の信濃川の数値だけが異常に高い地点もあり、原因の追究が必要でした。

■ 今年は国土交通省の地元部局と協議、河川地図の提供、他の支所管内の団体への働き掛けや、公定法による精密な水質調査数値の提供(23箇所)を昨年の3倍に増すことが出来ました。

公定法による数値と実際のCOD値は同じ傾向を示しながら、微妙な差が見受けられます。来年はこの差をいかに縮めてゆくかと共に、公定法による水質調査地域の拡大を目指したいと考えています。

◎今後の課題

■ 県内全般の調査

今年も多くは多くの団体参加により、新潟県内一級河川5本の内、4河川の調査が行われました。来年は

残る下越の荒川流域と、地元の皆さんに直結した多くの二級河川の調査に当るため、県内各地で活動している多くの団体や、水質に興味のある個人の皆様のご協力をお願い致します。

■ COD数値の精度の向上

まだマニュアルに沿って測定していないケースが多く、全体の精度向上が課題として浮かび上がって来ました。初心者へのマニュアルの浸透を図るための努力が更に必要です。

■ 測定器具の充実

今年度CODの他、透視度測定を行った調査割合が4割以下でした。来年度は、各調査グループに1本の透視度計を確保し、同一日の県内の比較を行いたいと考えています。



ボーイスカウト第15団(新潟市鳥屋野地区)の調査の様子

■ 予算面の確保

今年度、新潟水辺の会は「身近な水環境の全国一斉水質調査」の為、助成金申請を出していましたが申請が通りませんでした。その為、各参加団体に経済面で負担をお掛けしました。来年度は「身近な水環境の全国一斉水質調査」充実の為、今年度より各方面に助成金申請を行い、予算の確保を図りたいと考えています。

今年の参加団体の皆様、大変ありがとうございました。来年も参加お願い致します。

加藤 功
(新潟水辺の会会員)

report 他門川か多聞川か

新潟の堀の中でただ一つ川という文字が付されたのが多門川であるが、その呼び名の由来について数少ない手元の文献などを頼りに考えてみた。

「タモン」には「多く聞く」の多聞と「多くの門」の多門と「他の門」の他門と3通りの言葉があって、それぞれ下記のような意味を持っている。

- 多聞——毘沙門天の異称（七福神の毘沙門天を単独で祀るときは多聞天と称する。開運出世、商売繁盛、武運、知恵などのご利益を授ける神）
- 多門——長屋風の武家屋敷が語源か。京都、奈良、新庄、新発田市等に「多門」の地名がある。
- 他門——主に宗教の世界で使われる言葉で「他の宗派」のこと。転じて「他の門流・流派」等を指す場合にも使われる。

どうしたわけか新潟では分家を「他門」と呼ぶ地域があるという（日本国語大辞典：小学館）

さて、他門川は江戸時代の享保15年(1730)阿賀野川の松ヶ崎開削によって、阿賀野川と河口を一つにしていた信濃川の水量が減り、河口部に多くの砂州が発達したことによって形成された分流（分派川）である。

この頃に描かれた絵図の地名標記を見ると下表のようになる。

——このように、分派川が図面に「多門川」（他門ではない）と標記されるのは、明治29年の「新潟市商業家明細全図」が最初のものである。この他若干の文書などを調べた結果、現在までに到達した結論は以下のとおりである。

元文1年(1736)中島の一角（上島の上流部）に毘沙門堂が建てられ、後に「此辺毘沙門寄付地」と呼ばれるようになり、このあたりに移転した町並や通路に毘沙門と同義の「多聞」や誤用された「多門」あるいは「他門」等が付された命名がなされた。

そして、いつのまにか「大川前通が他門と呼ばれていたことにちなんで他門川と呼ばれ」るようになった。

現在、他門川跡地は「上大川通」や「秣川岸通」等と改称され、付近に「南多門町」「北多門町」「西厩島町」「東厩島町」「南毘沙門町」「北毘沙門町」「新島町通」等往時を彷彿させる地名が残されており、「他門川公園」だけが分派川の存在を物語っている。

そして、毘沙門堂は毘沙門町にひっそりと姿を留めている。

石月 升
(新潟水辺の会会員)

年号	西暦	絵図等の名称	標記された地名等	出典	備考
享保15	1730		阿賀野川松ヶ崎開削		
享和1	1801	新潟商工業地域図	下島、新州崎町、中州崎町、古州崎町、他門横町、毘沙門、馬屋島、ハンノキ島、島、島、此辺毘沙門寄付地	新潟市史下	他門川形成
天保7	1836	御下ヶ絵図之写	毘沙門島、玄的島	大河津分水史1	
嘉永2	1849	新潟真景	毘沙門、榛島、梨林	小尾勘五郎筆	
慶応2	1866	推定図	下島、上島、厩島、秣島、榛島、	図説新潟市史	
明治29	1896	新潟市商業家明細全図	多門川	小山信次郎	
明治33	1900	西蒲原郡町村図	大島、網川原、出来島、上所島、下所島、平島	西蒲土地改良史	
明治36	1903	新潟港修築工事竣工平面図	多門川	内務省新潟土木出張所	

report 05 中ノ口川 燕市水辺の祭典 (燕楽 水辺の巻)

台風11号が去った二日後の8月27日(土)、快晴の燕市中ノ口川左岸大曲河川公園で、『燕市水辺の祭典(燕楽 水辺の巻)の川下り』が、燕市と大曲河川公園ファンクラブが主催し、燕-風の子クラブ、子どもの水辺サポートセンターや新潟水辺の会が支援して行われました。

この支援事業は、

1. 新設された「中ノ口川左岸大曲河川公園」の積極的な活用と共に、市町村合併で隣接となった新潟市民、三条市民と燕市民の都市と地方の体験交流を図る。
2. 信濃川水系中ノ口川の自然や歴史の豊かさを確認しながら、舟での楽しい乗船体験を通して、川面の目線から郷土“つばめ”の街を再発見する。
3. 当日行われる「燕笑店街イベント 200m いちび」と連携し、水辺を楽しみながらイベント会場を結ぶ新たな交通手段とする。

を目的に、新潟水辺の会会員の高橋裕雄氏制作のNETボート3艇と、(財)河川環境管理財団のEボート3艇を使い約1.5km下流の仲町までを、約300名の幼児から80歳の高齢者までの人々が川下りを楽しみました。



中ノ口川大曲河川公園から燕市の中心市街地付近まで約300人が川下りを楽しみました。

当会から大熊代表を始め23名の会員が会場の受付からNETボートや監視船の操船、乗船口・下船口の介助に当たりながら、中ノ口川の川風と夏の風景を楽しんできました。



ボートに乗ってみて「ここに住んでいてよかった」と感じた参加者も多くいました。

参加者からは

- ・川の中から見ると又違う景色が広がって素晴らしい一言でした。
 - ・いつもと違った景色ですずしく、楽しく参加できました。
 - ・こんな身近にすてきな自然を感じることができて最高でした。
 - ・橋の下をくぐったり、普段できないとても貴重な体験でした。
 - ・燕市は市街化が進んできたが、中ノ口川から見た燕市はまだ自然が多く残っていることがわかった。
 - ・燕にお嫁に来て8年。ここに住んでる私は幸せです。
 - ・40年も燕に住んでいて、中ノ口川を下ったのは初めてなのでとても良かった。
- などの意見が多く寄せられました。

報告 加藤 功

report 第3回佐潟クリーンアップ活動レポート

地域住民主体で佐潟周辺の環境整備と保全活動を推進しようと「第3回佐潟クリーンアップ活動」が9月24日、新潟市の佐潟で行われた。



刈り取ったヨシを粉碎し飼料に利用する。

この催しを主催したのは佐潟クリーンアップ実行委員会（高野五三郎実行委員長）。同実行委は、赤塚漁業組合、佐潟と歩む赤塚の会、地元住民有志で構成されている。この日は台風の影響が心配されたが、地元小中学生、企業や団体、市民団体の協力を得て約300名が清掃活動に参加した。

環境省グリーンワーカー事業として支援を受ける最終年の今回は、従来の清掃活動のほかに舟道のドロ上げ、ヨシ刈り作業を試みた。これは昨年末からの新潟市の佐潟保全計画の見直しを協議する佐潟自然環境検討委員会で地元赤塚の検討委員が共同提案した※「地元提案佐潟保全策（古老の知恵から）」が了承されたことを受けて見直しとして行われた。

開会式で高野実行委員長は「大切な財産である佐潟を次世代に継承する契機になればと期待する」とあいさつした。その後、清掃活動、舟道ドロ上げ、ヨシ刈りの各グループに分かれて参加者は作業に取りかかった。

ドロ上げは事前調査で足元が悪いことが判明したため、潟舟に乗って鋤簾（じょれん）でかき出したドロを一時舟にためて、これをバケツリレーすることとした。用意した胴長を着用した参加者は、ロープで指定された範囲の湖底から慣れない手つきでドロをかき上げた。しばらくすると潟舟の中はドロで一杯になり、岸に寄せてはバケツに移し替えた。その後、ドロは近くの畑の肥料として再利用した。

一方、ヨシ刈りには地元の農家から草刈り機持参で参加してもらい、“ヨシ刈り隊”を編成した。7人が草刈り機をうならせながらヨシを刈り取ると、後を追うようにして他の参加者らがヨシを運び出した。道路脇に積まれたヨシは養鶏業者が持ち込んだ裁断機で処理し、飼料として袋詰めされた。計画し

ていた約1,800m²を約1時間で刈り終えると、周遊道路から湖面が見通せる状態となった。水面とヨシ帯のみという単純化されていた佐潟に干潟環境が創出された。この環境を好む動植物の出現を期待したい。

閉会式では佐潟で採れたヒシやレンコンの試食コーナーが用意され、初めてヒシを食する参加者もいた。ゴミが山積している上潟の奥でスズメバチが活動していたために、担当したグループは早々に撤収となった。このため昨年比べて回収したゴミも少なかった。ゴミの散乱状況を調べる事前調査でもゴミは目立たなかった。地元住民上げてのクリーンアップ活動が不法投棄の抑止効果となっているのなら幸いである。

末筆ながら新潟水辺の会の皆様には今年も多くの参加、協力を頂き感謝しています。今後もよろしくお願い致します。

寄稿 佐潟と歩む赤塚の会・涌井晴之

地元提案佐潟保全策

平成17年2月24日資料より一部抜粋

佐潟は閉鎖性水域であることから有機物の堆積による浅底化や水質汚濁が進行している。潟内の植物やプランクトンなどの生物生産、分解が密接に関わっていることが推測できる。

①かつて実質的に利用（保全）してきた地元の知恵を生かすこと②多くの資金をかけないこと③可能な限り地元及び市民参加型の保全活動も可能なこと④人海戦術に近く様々な状況に柔軟に対処できる方策であることなどを基本に考える。

■舟道のドロ上げ

潟水の通り道としてかつての舟道を中心に「何らかの方法」でドロ上げを行い水の流れを改善し、全体に広がるヘドロを呼び寄せて潟水の浄化を図りたい。

■ヨシ帯の管理試行と水田環境地の管理

二十数年来、毎年ヨシが生育し、そして朽ち果てる。この繰り返りで分解速度の遅いヨシ遺骸の堆積化が進んでいる状況にある。これではヨシ本来の水質浄化作用も機能しない。夏場、生長し窒素などを吸収したヨシを刈り出す（青刈り）。再び出てくるヨシも適宜刈り出す。これは水質の浄化にもつながる。刈り取ったヨシのサイレージ（飼料）化などの利用（ワイズユース）も進めたい。（時期はオオヨシキリなどの営巣活動を考慮する）

以下略

report 他門川再生研究フォーラムイン新潟

「ソウル市の都市河川清溪川再生に学ぶ」と題し、「他門川再生研究フォーラムイン新潟」が9月17日(土)に開催されました。会場は他門川通りにほど近い、木揚場教会というお寺の本堂で、100人以上の参加者が会場を埋め尽くしました。



清溪川再生事業を紹介しながら新潟の堀割再生へエールを送るソウル市清溪川復元推進本部工事3担当官の李龍太氏



清溪川完成予想鳥瞰図(李龍太氏発表資料より)

このフォーラムは、新潟島の堀割を復活させようという一連の動きの中で、新潟水辺の会が主張する「他門川」の再生について、現在韓国ソウル市で復元事業が進行中の清溪川をモデルに議論することを目的に開催されました。

昨年9月に新潟水辺の会が、ソウルで再生事業が行われている清溪川を見学し、深く感銘を受けたことから、ソウルから清溪川再生事業担当者である李龍太(Lee Lyong Tae)氏をゲストに呼び、基調講演およびパネルディスカッションに参加していただきました。

李氏の講演では、清溪川の歴史から始まり、以前、高速道路建設のため、蓋をされてしまったこと、近年、その高速道路が老朽化していたことや周辺の交通事情の深刻化が説明されました。さらに、現ソウル市長の選挙時に、現市長が、清溪川再生事業をマニフェストとして掲げ当選した経緯などが話されました。さらに、再生事業の概要と進捗状況などが説明され、日本では考えられないようなスピードで進んでいる工事の内容に参加者は興味津々で聞き入っていました。

また、新潟市長の篠田昭氏やNPO全国水環境交流会代表理事の山道省三氏、地元礎町振興会の斎藤力氏、NPO堀割再生まちづくり新潟代表川上伸一氏をゲストに招きました。斎藤氏には李氏の講演の後、他門川周辺の歴史について、盛りだくさん講演していただきました。水辺の会からは上山寛氏、石月升氏、皆川袈裟雄氏がそれぞれ他門川への思いを発表し、それを元に大熊孝水辺の会会長の進行でパネルディスカッションが行われました。

上山氏らは、堀割再生の中でなぜ他門川なのか、他門川再生を具体的にどのような視点で考えるべきかの提案をされ、歴史的な背景や、景観とまちづくりの視点、他門川を河川として蘇らせるのか、運河として蘇らせるのかといった再生の手法についてなど論じられました。また、ロマンや情熱があつてこそ、よいものができるという熱い思いも語られました。

パネルディスカッションでは川上氏をはじめ、他門川を含めた新潟の堀割再生への思いや考えを述べ、山道氏からは関連事業はすでに各地の政策に盛り込まれたりしているのでは、是非新潟もがんばってほしいというエールをいただきました。また、韓国から、李氏とともに来られた、朴保炫氏からは清溪川に負けないうらいがんばってほしいというような励ましの言葉をいただきました。

清溪川は、10月1日、完成式典が行われ、わずか2年という速さで出来てしまいました。他門川も五年後には再生事業が終了していきたくらいでしょうか・・・

寺村 淳
(新潟水辺の会事務局)

■イベント情報

10月22日(土) 13:00～17:00
新潟市民プラザ(NEXT21)
「にいがた市民環境会議」

基調講演 大熊孝「にいがたの自然環境を縄文文化からとらえ直す」
パネルディスカッション
「にいがたの環境問題を歴史から学び、改善に向けて熱く語る」
問合せ：新潟市環境対策課 025-228-1000 内 2728

12月17日(土) 15:00～18:00
クロスパルにいがた4階
「水辺シンポジウム」

テーマ：信濃川の上下流交流を考える
その後、望年会あり
問合せ：新潟水辺の会 025-264-3191

■通船川に市民の力で通学・交流歩道橋を架けよう！

新潟市松崎地区の子供たちが、大形小学校・大形中学校に通うためには、交通量の多い薬師橋と松崎大橋を迂回して遠い道りを歩かねばなりません。もし、通船川に通学用の歩道橋があれば、その道りをかなり短縮できます。雨の日や雪の日を想像すると、この橋が一刻も早く実現して欲しいものです。また、通学だけではなく、この橋が架かれば、通船川を挟んでの住民同士の交流も一層盛んになり、盆踊りや灯籠流し、川のあるまちづくりの拠点になるのではないのでしょうか？

公共事業が抑制される昨今、新規事業にはなかなか予算がまわりません。これを解決するためには、地域住民が強く要望する必要があります。その際、子ども達を含めた多くの住民からの歩道橋建設賛同の署名と、橋の費用の一部となる募金を集めて要望すれば、それは一層強い力となります。

通学歩道橋をぬくもりのある木橋とすると、通船川の川幅約32mに幅2mの橋で約3000万円かかるそうです。このうちせめて3分の1ぐらいいは市民から集めて要望したいと思います。

この橋は通船川・栗ノ木川下流再生運動のシンボリックな存在になります。川沿いの市民・企業・学校・団体など、あらゆる人々の想いと力を結集して実現したいものです。まず、この募金を行う組織を立ち上げたいと考えます。そのために第1回目の会合を行います。

大形本町第1自治会会長
大形地域環境再生委員会委員長
佐藤 泰雄
通船川・栗ノ木川下流再生市民会議会長
大熊 孝

第一回市民募金設立準備会合
10月25日(火) 18:30～20:00
新潟市大形連絡所 会議室
問い合わせ：佐藤泰雄(025-271-9639)

コミュニティに新たな物語をつくらう！

■会員紹介

m e m b e r s

佐藤 英世 地球環境守り隊主宰、新潟県自然・環境保全連絡協議会会員



水辺の環境には、機能景観問題と水質問題がある。機能景観は見た目である程度判断できるが、水質に絡む汚染問題は見た目だけでは判断不可能である。環境白書にもあるとおり、水質汚染の原因の60～70%は家庭廃水である。近年の化学物質ので、我々一人一人が日常使用の化学物質、特に大量使用の化学洗剤を見直すことが重要である。きれいな水とそこに安心して憩える水辺、これが我々の望む空間ではないでしょうか。

本誌63号の会員紹介において、佐藤 英世様の紹介文に誤字がありました。佐藤様および関係の方々へご迷惑をお掛けしましたことを深くお詫び申し上げますとともに、あらためて訂正したものを掲載させていただきます。(編集担当一同)

発行：特定非営利活動法人 新潟水辺の会

事務局：〒950-2264 新潟市みずき野4-7-15 大熊 孝 方

Phone 025-264-3191 Fax 025-264-3250

e-mai: info@niigata-mizubenokai.or.jp

ホームページ: <http://www.niigata-mizubenokai.or.jp>

会の紹介リーフレットができました。ご希望の方は事務局までご連絡ください。